平和への願い
―ぼくにとっての戦争

石川康宏

今日は6月18日です。この文章をみなさんが読んでいる頃、「戦争法案」はどうなっているのでしょう。日本がどこから攻撃を受けなくても、地球のどこででも戦争ができるようにする、こんな法律を絶対に成立させてはいけません。ぼくは、そう強く思いながらこれを書き始めています。

父の体験、恐かった傷痍軍人

ぼくは、今58歳です。1945年に戦争が終わった時、父は17歳でした。秋田の出身の父は、その頃、九州の軍事工場で、魚雷の整備などをしていたそうです。「米軍機が機銃掃射に来ると、みんなで裏山に逃げた」「米軍機は工場だけをねらうから、あとは裏山にゴロンと転がって見ていた」「1mくらいのところに弾が落ちたこともあった」。幼い頃に、そんな話を聞いたことがあります。

ぼくが北海道の札幌に生まれたのは、戦争が終わって12年目の1957年のことでした。小学校に入った頃、よく読んでいたマンガ週刊誌には、「忍者」ものとあわせて「ゼロ戦」ものが、必ずといっていいほど載っていました。読み物のページにも、日本の戦闘機や軍艦、潜水艦の優秀さを誇る話が、かなりの割合でふくまれました。父に戦争の話を聞いたのは、そんなことに触発されてのことだったかも知れません。

もっと小さな頃、父に手を引かれて街を歩いていて、その場から走って逃げたくなるような恐さに出くわしたことがありました。軍帽をかぶり、白衣を着て、松葉杖によりかかり、静かに頭を垂れた傷痍軍人が立っていたのです。デパートが立ち並ぶ、大きな通りの歩道の上でした。

傷痍軍人というのは、戦争で傷を負った軍人のことです。軽傷であれば、時とともに傷は癒えます。しかし、手や足、目や耳を失えば、戦後の生活は大変です。そこに立っていた人は、もう軍人ではありません。しかし、軍帽をかぶり、そうして人前で頭を垂れる人のことを、父はやはり傷痍軍人と呼んでいました。足元には、お金を入れるための空き缶などもあったのでしょう。今思えば申し訳ないことですが、幼いぼくには、なんだかそれがとても恐ろしい姿に見えたのでした。

元「慰安婦」、苦しみつづける元日本兵

その後、しばらく、ぼくにはこうした生々しい、肌ざわりのあるような戦争との接点はありませんでした。

18歳で京都に移ったぼくは、大学で学生運動に加わります。ベトナム戦争でのアメリカの敗北（1975年）についての議論や、1978年の最初の「日米防衛協力の指針（ガイドライン）」に反対する運動も、それぞれ真剣に取り組みましたが、戦争の実感という点では、どこかに「遠さ」を感じていたのも事実です。

転期が訪れたのは、2004年、46歳の時でした。大学の教師として学生たちと韓国へ行き、「ナヌムの家」という施設で、元「慰安婦」の女性と出会ったのです。「慰安婦」というのは、かつて日本軍が兵士の性欲を満たすために、戦場に監禁した女性（性奴隷）たちのことです。軍が「慰安所」と呼んだその場所を、国連など国際機関は今日レイプセンターと呼び、日本政府に問題の誠実な解決を求める決議は、アメリカやEU（現在加盟国は28カ国）の議会でも可決されています。

「戦後は終わっていない」。そのことをぼくに教える、まぎれもない生き証人でした。心身に戦争の苦悩を埋め込まれ、日本政府への強い憤りをもって毎日を生きる老いた女性たち。「ぼくは、あなたたちに計り知れない苦しみを与え、今日まで満足な謝罪もせずにいる国の主権者です」。ぼくは正面からその女性の目を見つめることもできませんでした。

帰国して、「慰安婦」問題はもちろん、戦争の歴史、侵略と加害を直視しない戦後の政治と社会のあり方を、意識的に学ぶようになりました。ゼミの学生と毎年「ナヌムの家」を訪れるようにもなりました。オランダをふくむ各国の被害者の証言映像も見ました。日本人310万人が殺されるあいだに、アジア人2000万人を殺しながらの行為でした。他方、幼い頃からの軍国主義教育により、略奪者、凌辱者として育てあげられた、元日本兵の苦しみの記録にも接しました。「小さな赤ん坊の胸に泥で醜く汚れた靴を乗せ…踏み殺しました」。そう声を振り絞った瞬間に、泣き崩れる元兵士。「誰か一人でもいいから、おれに命の大切さを教えてくれる人がいれば」という切々たる嘆きの声。戦場で両腕を失い、「自分の子どもをこの手で抱くことができなかった」と涙を流す戦傷病者の映像も。アジアに向けて侵略の手先だった兵士たちは、軍国日本の指導者たちに、平穏な人生を奪われた被害者としての側面ももつのでした。

戦場の映像が大きな役割を

はじめて韓国へ行ってから、今年で12年になります。そのあいだに、手を握り、同じテーブルでゴハンを食べ、つらい経験を聞かせてもらった元「慰安婦」が、何人も亡くなっていきました。ぼくにとってその人たちは、元「慰安婦」という文字の上だけの人ではなく、一人一人を思い浮かべることができる「あの時のあの人」です。

「戦争は二度と繰り返してはならない」。多くの体験者が、力を込めて語る言葉です。体験者だからこその重みのこもった言葉です。しかし、話を聞く側が、その重みを受け止めることは容易ではありません。ましてや今は証言のできる人が減っています。

想像力の欠如を指摘することも可能でしょうが、何の手がかりもないところで、人は想像力を発揮することはできません。その距離を縮める上で、ぼくは戦場の映像が大きな役割をはたすと思っています。家族が目の前で、この上ない理不尽な理由で殺されたとき、人はどんな顔をして、どんな声をあげて泣き叫ぶものか。戦場に起こる様々な出来事の、ほんの一部だけでも見ておけば、事実を想像する力は大きく広がります。

戦争と平和を考える、みなさんの取り組みにもぜひ生かしていただきたいと思います。

ぼくは「戦争法案」に反対です。

ぼくは「戦争」そのものに反対です。

殺し、殺される以外の方法で、いかにして世界平和を大きく育てていくか、そのことでこそ、みなさんと力をあわせたいと思っています。

いしかわ　やすひろ／1957年札幌生まれ。神戸女学院大学。専門は経済学。憲法が輝く兵庫県政をつくる会代表幹事。著書に『「おこぼれ経済」という神話』（新日本出版社）など多数。